

社会⑤【中学校】

地理的な事柄や条件と 関連させた歴史的事象の指導

学力調査の結果より

歴史的事象と地理的分野との関連性を図った指導を心がけるとともに、地域の歴史を深く掘り下げて考えさせる指導を大切にしていく必要がある。

★指導のポイント★

- 1 発問の工夫により、地理的条件と歴史的事象との関連を図る
- 2 歴史的事象の理解を深めるために、討論を取り入れる
- 3 多面的・多角的に思考させる

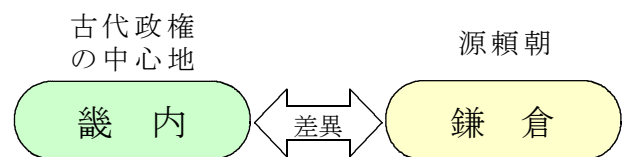
発問の工夫により、地理的条件と 歴史的事象との関連を図る

地理的な条件と歴史的事象を関連させるための授業として、次のような展開が考えられる。

ここでは、「鎌倉幕府の成立」を例に説明する。

①導入部

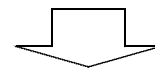
鎌倉幕府以前の政権の所在地を確認し、違いに目を向け、課題をもたせる。



②展開部（I）

中心となる発問（1）をし、追究活動を行う。

中心となる発問（1）
「頼朝が畿内に幕府を開かなかったのはなぜか」



予想される生徒の反応

- 支配構造に着目した意見
 - ・朝廷が近くにいると政治がしにくくなる。
 - ・武士は朝廷や貴族から軽く見られている。
- 武士との関係に着目した意見
 - ・育った地で部下が関東に多くいた。
 - ・部下と特別な関係を結んでいた。
- 鎌倉の地形に着目した意見
 - ・山に囲まれ、敵が攻めにくかった。
 - ・海があり、ものを運びやすかった。

生徒は、京都と鎌倉の位置関係や距離、

地形などの地理的条件に着目し、地図や文献史料を使って追究を始める。鎌倉に幕府を開いた理由を問うよりも、それまで政権が置かれていた畿内に幕府を開かなかった理由を問うことで、追究活動は活性化する。

発問の工夫によって、歴史的事象は地理的条件の影響を受けながら成立するという教師の捉えさせたい内容を、生徒は自然と獲得することとなる。



歴史的事象の理解を深めるために
討論を取り入れる

③展開部（Ⅱ）

「畿内と鎌倉」という地理的条件に視点をおいた意見の中に、「朝廷と幕府」という考えが出される。

そこで、その考えに着目させ、頼朝と武士の関係について、学習を深めさせるために、討論を取り入れる。

中心となる発問（2）

「頼朝は朝廷と敵対することを恐れていたのか、それとも恐れていなかったのか」

- 恐れていた
 - ・ 恐れていたなので、守りやすい鎌倉の地を選んだ。
 - ・ 対立を避けるために遠いところに幕府を開いたのではないか。
 - ・ 朝廷から征夷大將軍という地位をもらっている。
- 恐れていなかった
 - ・ 東国武士と強い結び付きがあったので、怖くなかった。
 - ・ 武士は戦うことが仕事なので、朝廷や貴族を恐れていなかった。

この討論を通して、歴史的事象（武家政権の成立）についての理解がより深まると考える。

④展開部（Ⅲ）

資料の読み取り等により、「御恩と奉公」など学ばせたい内容を理解させる。

中心となる発問（3）

「本領安堵という考え方は、武士にとってどのような意味をもつのか」



御恩と奉公

提示資料

「幕府の支配地の変化（承久の乱前後）」
「北条政子の言葉」

⑤終末部

本時を振り返り、学習した知識や考え方をさらに確かなものにする。

そのために「源頼朝が畿内に幕府を開かなかったのはなぜか」ともう一度問いかける。生徒は、「朝廷との関係」「本領安堵」「御恩と奉公」などの考え方を取り入れながら、自分の考えをまとめる。最後に、本時以降の課題を提示して授業を終える。

次時以降の課題

「古代の土地制度との違いは何か」

多面的・多角的に思考させる

教師にとって教えたい歴史的事象の学習が、生徒にとって細かな知識を記憶するだけの活動に陥ってはならない。

地理的事象や身近な歴史などの具体的な事象との関連をもたせることで、生徒の歴史に対する興味や関心を高め、多面的・多角的に考察していく能力と態度を育てることが重要である。